らいてうを記念する会ニュース

新しい太陽のもとで

櫛田　ふき

憲法じゅうりんの悪政の数かずも夢かとばかりの初日の出。新しい太陽が輝く。私たちも不安や怒り、戸惑いや力不足、疲労の古い衣を脱ぎ捨てる。新鮮な自分を見いだして希望、自信、不退転をもって行く手阻むものとのたたかいに勝利する、一九九五年はまさに正念場である。

「平塚らいてうを記念する会」も三年目を迎えた。常任世話人はいずれも片手間のボランティアだが、草の根の運動として「急がずあせらず、怠らず」を旨として進めている。よそ目には定めし遅々としていると見えようが、らいてう記念碑建立は、すでに夢ではなくなった。湘南茅ヶ崎で現実に運動がすすんでいるのだ。

土地なし、金なし、特権もない女たちの仕事の成否は、貴重な試練だと考える。それなしには、平和憲法擁護も核兵器廃絶も叶うまい。今年もスローガンはこれ。

「烈しく欲求することは、事実を産む最も確実な真原因である」（らいてう）

（世話人代表）

たった一度の訪問

富永　和重

たった一度だけ、平塚らいてう先生をお訪ねした時のことを、私は宝物のように大切に心の中にしまっている。一九五五年頃だろうか、「無痛分娩母の会」の顧問であったらいてう先生に、医師の長橋千代先生を中国に送る推せん人になっていただこうと成城のお宅にうかがった。

緊張しきってお願いする若い私たちの言葉を静かに聞いて、ご快諾くださった。

「新しい女」のイメージとは違う、優しく温かい、しかも侵し難い気品のある方だった。

後日、私の母の友人で「青鞜」の社員だった小林哥津さんにお会いした時、その話をしたら「そうですってね。『若い人はいいわね』といっておられたわ」といわれた。

二十代の私にその意味は理解できなかったが、あの時のらいてう先生の年齢に近づいた今、やっとわかりかけてきた。二度と取り戻せない若さ、平和憲法の下で生きていく若い人、封建制の残滓濃厚な壁の中で女性解放の声を上げた先生のこもごもの想いが、この言葉にこめられていたのだと……。

（常任世話人）

東京と茅ヶ崎の交流会

飯田橋・摩天楼飯店で

常任世話人会での話し合いにもとづいて、らいてう記念碑の建立について茅ヶ崎・らいてうの会との懇談を申し入れてありましたが、十一月二十八日、それを東京でおこなうことになりました。

当日は、東京のらいてうの会から七人、茅ヶ崎から六人が出席、昼食をとりながら懇談しました。琴桜さんの公演成功を喜びあい、今後の活動のアイデアなどを出しあいました。

話し合いで確認したことは次の三点です。①碑建立についての市交渉は四月の地方選後に。②具体的内容を決める際は二つの会が対等平等の立場で話し合い、合意の上ですすめる。③建立にかかる費用は二つの会が等分して負担する。

常任世話人会では、建立費用等についてはあらためて検討のうえ、会員の皆さんにお知らせすることにしました。

著者・小林登美枝さん囲んで
「陽のかがやき」出版祝う

小林登美枝さん（常任世話人）の近著『陽のかがやき―平塚らいてう・その戦後』（新日本出版社刊）の出版を祝う会が、十二月十三日、東京・新宿で開かれました。この会をよびかけたのは、ドメス出版の鹿島光代編集長。出版人が他社の刊行物に感動して祝う会の音頭をとるなど例のないことでしょう。

出席者は、らいてうの長男・奥村敦史さん（早稲田大学名誉教授）綾子さん夫妻、らいてうの出身校、日本女子大前学長の青木生子（たかこ）さんなど多彩な顔ぶれで四十人。小林さんが週二回のコラムを三十五年間書きつづけている信濃毎日新聞の読者も長野から上京、宝井琴桜さんもかけつけました。

櫛田ふきさんの音頭で乾杯。奥村敦史さんは「私よりよく母を知り、あちこち取材して、母の人生を豊かに、情感こめて書いて下さった」とあいさつ。評論家の逆井尚子さんは「らいてう臨終のシーンはボーヴォアールの『穏やかな死』を思わせる感動の筆致」と語り、作家の松田解子さんは「小林さんの本を案内人として、らいてうの論文を読み直している。今こそ一人ひとりが〝らいてう的自我〟を持つ時」とのべました。（写真は右から奥村夫妻、小笠原貞子前国会議員、小林さん）

宝井琴桜さんの創作講談
「平塚らいてう伝」公演

茅ヶ崎

茅ヶ崎・らいてう記念碑を建てる会では、十一月九日、茅ヶ崎コミュニティーホールで、女性講談師・宝井琴桜さんの創作講談「平塚らいてう伝」の公演をおこないました。茅ヶ崎市と同市教育委員会の後援も得て、当日の参加者は百五十人余と盛会でした。

茅ヶ崎・らいてうの会の副会長・岡崎周（ひとし）さんが開会あいさつ。「東京にある平塚らいてうを記念する会からぜひ茅ヶ崎にらいてうの碑を、という要望があり、これを受けて茅ヶ崎・らいてうの会を設立しました。この会の目的は、らいてうの思想の普及活動と記念碑建設費の募金活動の二つです。この活動に皆様のご協力、ご参加を」と簡潔に経過と会の趣旨を述べました。

女流初の真打ちの琴桜さんは、渋い苔色の着物に同色の袴姿で登壇。今は講談界も三分の一は女性だけれど先頭に立つ者への風当たりは強かった、と自身の経験も語りながら、「まして今から八十年前には―」と青鞜の世界へ参加者をいざないました。塩原事件を語りながら、塩原には「煤煙の碑」があるのに、らいてうの碑がどこにもないのはおかしい、らいてうの「愛のふるさと」茅ヶ崎に、ぜひ記念碑をと、らいてうの会の活動を励ましました。青鞜の発刊、奥村博史との出会い、結婚、日蔭茶屋事件と語りつぎ、茅ヶ崎を去るところまで、よどみなく語り終えました。

公演後のアンケートには、「次回を期待します」と引きつづきの公演を待つ声が多く、「らいてうの主張がよく理解できた」「琴桜さん自身もすばらしい女性ですね」など、好評でした。

講談に聞き入る参加者

事務局長の河野皓子さんは「らいてうの会といっても『自然保護の会ですか』といわれるほどですから、らいてうを広く知ってもらおうと企画しました。公演に先立って、事務局の六人が東京に行って琴桜さんの講談を聞き、これなら、と自信をもって準備に拍車をかけました。マスコミも協力的でしたから、当日の朝は問い合わせの電話が鳴りっぱなしでした」と成功の喜びを語っていました。

シリーズ

らいてうの周辺

「青鞜」の小笠原貞子

井上美穂子

小笠原貞子については、いまは全く知られていないといっていいだろう。らいてうは『元始、女性は太陽であった』のなかで「『女子文壇』の投書家でここで育てられた人。生田花世と同じ系統で、小説のほか絵の勉強もしていた。色白のほっそりした美しい人だった。早死したと聞いている」と書いている。しかし一八八七（明治二十）年、仙台で生まれた貞子は、一九八八（昭和六十三）年、百歳まで長生きした。

女子美術学校で絵を学ぶが、「絵にあきたらない」ものを感じて小説を書き始め『女子文壇』『秀才文壇』などに投書、『青鞜』にも参加した。『青鞜小説集第一』の木版装丁は貞子の手によるもので、ここに収められた彼女の小説「客」は、自分の分身のような若い女性をヒロインに、女性の生き方、悩み、結婚などをえがいている。

作家として身を立てようと思った時もあったようだが、結婚後は一人息子を芸術家に育て上げることに専念。夫死亡後、再び油絵を描きだし、一九七二年、埼玉県展に入選、八十四歳で個展を開いた。絵はカンバスだけでなく、ベニヤ板の両面にさえあきることなく身近な花々を量感あるふくよかなタッチで描いている。このころの新聞に「ハイカラガールもいつしか絵や小説とは無縁のまま、おばあちゃんになってしまいました」と話している。しかし一九七八年九十歳のNHK浦和のラジオインタビューでは「平塚さんと青鞜社を始めた」と『青鞜』時代のことを語っている。『青鞜』に関わっていたことが「誇り」でもあったということに彼女の強さを見る思いがしている。

（らいてうを読む会）

らいてうグッズ紹介

◎テレフォンカード　らいてうの写真、青鞜表紙絵、元始女性は―（らいてう筆）の三枚セット（二千七百円　一枚千円）

◎絵はがき　長沼智恵子、尾竹紅吉、奥村博らによる青鞜表紙絵やらいてうの写真・筆など六枚セット　二百円

ご注文は☎03（3401）6147（事務局）へ。

事務局メモ

9月28日　ニュース第7号発送。立松隆子さんから中村洋子さんへ実務の引継ぎ。

賛助会費の請求書発送

10月7日～12月9日　「都民カレッジ・平塚らいてうの世界」10回（米田）

11月4日、9日　「かながわ女性アカデミー講座・らいてうと青鞜の女性たち」（折井）

11月9日　茅ヶ崎での琴桜さん公演に参加（塩谷）

11月28日　飯田橋・摩天楼で、茅ヶ崎・らいてうの会との懇談（櫛田、小林、井上、木村、白井、中村、塩谷）

12月9日　ニュースについての打ち合わせ（白井、塩谷）

12月13日　小林登美枝さん出版記念会

12月21日　立松隆子さんを励ます会

12月22日　常任世話人会